

紅い花

(八)目覚め

琉 紅

(八) 目覚め

冬の琉球に、身を凍らせる程のこの年一番の冷えた北風が吹いたが、中山の地、浦添城の上で急に止まった。そこだけが異常に熱く、何かが起こることを知らしめるようであった。

城下には祭事を教える学校があった。しかし真の目的は、優秀な生徒を全島から集めては選り、軍師としての再教育だった。軍師は戦争のやり方を熟知し、王に代わって兵らに命令していく程の権力のある地位にある。

明国の戦国時代に完成した教科書を利用して、戦争を勝ち抜くため、戦略のプロを養成する。尚巴志は早速、それを取り入れたのである。

今、最も過酷な授業が行われようとしていた。それは、洞穴の中に入り、一週間生活し自己鍛錬をするものであった。名目はそうだが、最終的な軍師への選抜試験を意味している。

洞穴の入り口で、大君は女子十数人の前で言い放った。

「自然の力やこの世の戯言を理解し、それらを見ないで利用するには、まず己を静める術を身につけることじや。それが出ないようでは、浮世に流されて気が狂ってしまう」

一足先に養成所を修了した青江が、派手な着物をまとい笑

みを浮かべながら一歩前に出た。

「これから、私の言うことに従ってもらいます！」

美久は洞穴で起こるこれからの事より、目の前で威嚇する青江の言動が気になっていた。

（この人はどうしても好きになれない。抑えきった自分の本心、豹変する態度。見抜けないわ。考える程、私は気を狂わされそう……）

数人の弟子は、暗闇の洞穴の中ですぐに恐怖を感じたのか、一刻も持たずに助けを求めた。

二日後、殆どの者は耐えきれず、外に出たいと申し出た。ある者は、暗闇の中で発狂し意味不明な言葉を発し始め、青江によって外に引きずりだされた。

残ったのは、美久ともう一人になった。彼女は落ち着き払った顔で三日後、わずかな水だけで暗闇の中に座していたようだったが、美久に近寄ってきた。

「もう、ダメ。頭ん中がおか、おかしい。誰かと話をしないと、耐えられない」

「しつ、会話は禁止されているのよ」

「いいの。ああ、もう、いいのよ。出して！」

と、最後は大声に変わった。

洞穴の隅々まで響き渡り共鳴した。

その声は美久の頭の中に容赦なく入り込んでかき乱した後、風のように抜けていく。

美久だけが残った洞穴の中へ、青江が蠟燭ろうそくを手に近づいてきた。

頬を接し、黙して座している美久の耳元でささやいた。

「皆、外に出て家に帰って行つたわ。無理せずにあなたも、ここを出て食事をたっぷり取って、皆と楽しくお話をしたら？　また挑戦する機会があるわ、その時にしたら？」

「いいえ。早く次の段階に移りたいのです。これは終わらせましょう」

美久は蠟燭の火に照らされた青江と、目を合わせて笑った。

青江は焦って火を消した。

（なんなのよ、この美久とかいう女は。優しくしてあげれば生意気な口をきいて。私にしか耐えられないはずなのよ）

「最後の3日は、水も食事もありません」

（いつも特別扱いされていい気になって、ぶざけるんじゃないわよ。私はあなたを絶対に許さない。ここで死ねばいい）
離れた場所にあった僅かな水の入った壺と食べ物が入った箱を、無慈悲にも取り上げた。

（北山王子推薦の特待生なんて、私はそんなの絶対に許さない。ここで死ねばいい）

青江は暗闇の中、睨みつけた。

美久は、暗黙の洞窟で半日を過ごした。

食べ物を取らず飢えを感じ続けると、全ての感覚、五感が研ぎ澄まされてくる。何としてでも生きようとする本能が顔を出すのである。

水や食事を取り上げたのは、鍛錬の一部では無く青江が勝手にした事だと分かっていた。自分が青江に心底嫌われている事も、勿論気が付いていたが、その理由はわからなかった空気穴、そこから漏れてくる熱い風に耳を向ける。

微かな音がそれに乗って伝わって来る。段々と外の世界が把握できるようになった。

雨が降り、それが木々の葉に当たるわずかな揺れ、人々のざわめきを感じ取れるのだ。水が地面に浸み込んで、暗闇の奥で滴り落ち音を発する。そこに指先を触れて、水滴を一粒、一粒を唇に持つていく。

岩の隙間に生える植物、その中を動く虫たちの存在をも分かるようになっていった。

洞窟の一番奥の池、水中にいる小さな海老や魚の動き、彼らと自分の鼓動までも。

彼女には、それらが耳や体全体から浸透し、頭の奥深くまで届いた。

やがて、暗闇の洞穴の奥にいるはずの体は、中と外の世界、すべてにつながっていった。

（この衝撃は何？ 気が解放され遠くまでつながっていくのを感じる。賢龍様まで届くの？）

立ち上がり、静寂な暗闇の中で両手を広げた。

彼女の心の目には、命の伝達、精霊達との交感という光が差し込んできたのだ。

美久は咄嗟に、右上に貫き出ている木の根を叩いた。その振動は、上に生えている木の幹に伝わる。すぐに鳥の飛び立つ羽の振動と鳴き声が伝わってきた。

その後、木の枝を撫でる静かな摩擦。大蛇が小鳥を狙っていた。それを美久が枝の振動で、小鳥に伝え飛び立たせたのだ。大蛇は、美久の存在を知り、怒りと悔しさをぶつけようと、木の枝に二度噛みつき、その揺れを根っこまで伝えた。

美久は手を咄嗟に離し、隠れるように沈黙を続けた。

青江のいじめでやった水や食べ物没収は、逆に美久の感覚を極限まで研ぎ澄ませ、覚醒させる導きとなった。

真冬というのに初夏のような日差しが照り続けている。

人の住む家の瓦屋根に炎を吹き付け、焦がすかの如くであった。

浦添のヌル養成所、大君の居る奥の部屋に、訓練を受けた女子らは一人ずつ呼ばれて入っていった。

大君の大声が、ほぼ規則正しい時間で部屋中に広がっていく。

「馬鹿な、もう一度、言ってみろ！」

と、怒鳴られたのは、洞窟で最後まで美久の近くにいたが、耐え切れずに抜け出した女弟子だった。

「はい、暗闇の中に魔物が見え、耳からはその声が響きました。私は怖くて耐えることができません。神様のいらっしやるこの地上でしか生きてはいけません。誰かといつもおしゃべりをしないと、おかしくなりそうで」

「もう、よい！」

大君は右手を振り、後ろに下がるように返事した。

さらに、隣の青江が発言した。

「私たちは、その魔物を扱うのです。神の世界に逃げ込むことでは、仕事ができません」

「ああ、ニライカナイの神様、私をお助けください」

彼女はそう漏らしては、両手を上に挙げた。

青江の口元は笑い、大君は横目でその顔を確認するや大きくため息を吐いた。

最後に美久の名前が呼ばれ、座敷の中央に座した。

向かい合う格好で大君は、こう訊ねた。

「問う、美久、正直に答えよ。嘘、偽りを申すな！」

「はっ、はい」

美久はあまりにも威圧する大君の言葉に、思わず下を向いてかしまった。

「洞窟の養成を通して、この能力はすでに備わったはず……今、流行の霊とか神は見えたか？」

美久は顔を上げて微笑する。

「暗闇の洞穴から、内と外にあるすべての命の鼓動が伝わってきました。目では見えない、耳では聞こえなかったものが、気で感じ取れました。水の力、雨が土に染み込み、再び湧き出てくるまでの流れを感じ取れます。それに生かされた命までも伝わりました。それら、水の仕事を神とするなら、『神は見える』と言います。ヌルとなりその場所を大事にしないといけません。赤ちゃんを育てるように」

パンツ、と大君は右の平手で畳を打った。

その音は部屋の外まで響き渡った。外で待機していた弟子らも、その音にびくっとした。琉球として、一つの鼓動が生まれ、鳴り響く様だ。

「ははっ、その答えをしたものは美久、お前だけだ。すばらしい……まだ、七つ橋を渡る儀式もせず、子をも授かってお

らぬのに、精霊、神に触れたのじゃ……いや、もうすでに久高島におるときから、感じているのである。ならば、いずれ私の後継者となる。いや、越えていくはずだ。期待しておるぞ」

大君には珍しく、絶賛する内容を言葉が発した。

青江は、美久を睨んだ。その両目は鋭く光っている。

（馬鹿な、あの女は悪霊が見えず、神も見えないと言っているのに、何故、大君はそれを褒めちぎるの）

兵法の講義は、真新しい紅色で塗り覆われた首里城北殿の一室で行われた。

美久を中心とした女子五人は二列に座し、がっしりとした体格の男性が兵の配列図を指し示し指導していた。

首里の丘の上にそびえる城、その北殿の一室から浦添を越えて、北の方には、暗雲が立ち込めていた。

これから起りつつある、琉球の動乱を暗示しているかのようだった。